

【別紙1】

本編 補足資料

<困り度1> 服を脱ぐ・着替えを繰り返す

(1) 当初の状況 (2019.8)

- ・全裸のまま、1日中更衣室で過ごす (B園)。
- ・基本的に一年中、ブラジャー、シャツ、靴下は身につけない。
- ・事業開始は11月の秋。上着・ズボンは着用されていた。

(2) 仮説・見立て

- ・服脱ぎのきっかけは、幼少期に“夏に汗がシャツにビタッとくっつく感覚が苦手”から始まる。冬は着用出来ており、夏に限定。
- ・屋食時は着用して食堂に来る等、状況を捉えて行動できる面あり。
- ・高等部までは、ある程度収まっていた。卒業後のB園での後追いの対応の中で、「服を濡らす」→「新しい服を着れる(着ていた服を着なくていい)」という図式に加え、夏の暑さや失禁が絡み複雑化。
- ・今は、場所と行動がパターン化。利用の中で連鎖的な行動を1つずつ整理してあげる事で、まとまりが見られるようになるのではないかと?
- ・環境を変える事を好機と捉え、利用初日、ブラジャー・靴下(「絶対履かない」と母は言われていた)の着用を働きかけ。受入れ初日のテーマとなる

<困り度2> 排泄① (失禁)

◆ 当初の状況 (2019.8)

どんな状況で	どの程度 (頻度や強さ)		どう対応してきた (収まりやすい・収まりにくい対応)	いつ頃、どのようなきっかけで始まった
	家	B園		
(園) 2019.8、更衣室で服を脱ぐ→投げる→職員が取りに行っている間に失禁する事が固着。場所はほぼ更衣室	基本的になし (トイレ通い止めず 30~40回行く為)	毎日3回くらい 多い時、1日10回以上	(家) トイレ通いは止めず、行ってもらっている (園) 排尿はどこでするのか、トイレに行くことを繰り返し伝える等	・地域小3までオムツ (学校のトイレに入れず。オムツに排尿。家では可) ・小4 特別支援学校入学後、学校でトイレ可へ ・中1、失禁・頻尿が始まる。泌尿器科へ通院。内診できず。“心の問題”と言われた ・B園利用後、増加 (服濡らしの延長で水道水を多飲)
(前兆) 失禁の際は、足の裏をバタバタと音を鳴らし、服を脱ぎ、両手をあげ、足は前後に開いた状態のポーズ	まれに、母が本人の欲しい物に鍵をかけると失禁あり			

<困り度2> 排泄② (ペーパーを空になるまで巻き取る)

◆ 当初の状況 (2019.8)

どんな状況で	どの程度 (頻度や強さ)		どう対応してきた (収まりやすい・収まりにくい対応等)	いつ頃、どのようなきっかけで始まった
	家	B園		
(園) トイレに行く度	なし (ホルダーにつけてない為)	1日2ロール以上。トイレに行く度	(家) ホルダーにはつけていない (園) 止めると他害が出る為、ロールを使い切る事を許容。ペーパーがなければ、タオル・軍手・ナプキンを流してしまう ・2019.7月からペーパーを設置していない	・高等部の頃、当初はペーパーが残りわずかになるとなくしたという傾向。 ・B園利用後、トイレ頻回へ。後追いの対応になり、行為増加。 ・2019.3 発作初発後更に頻繁へ (母)

第1期 まずあかりの家で生活を再構築

< 困り度3 > 睡眠の乱れ — 医療との連携 —

利用前		調整後	
	処方		処方
毎食後	バレリン錠100mg (抗てんかん薬) フルボキサミンマレイン25mg(抗うつ薬) リスベリドン0.5mg (非定型抗精神病薬) コントミン25mg (定型抗精神病薬)	毎食後	バレリン錠200mg (抗てんかん薬) レボトミン5mg (定型抗精神病薬) インヴェガ錠3mg (朝・夕) (非定型抗精神病薬)
眠前	フェノバルビット錠30mg (抗てんかん薬) レボメプロマジン錠25mg (抗精神病薬)	眠前	トリヘキシフェニジル2mg (抗パーキンソン剤)
		頓服	プロチゾラム (睡眠導入剤) (23時迄に眠れない場合服用) → 一度も使用せず(21~7時の睡眠)

- 利用前の相談に始まり、利用後も短いスパン(3日~1週)で、行動傾向や睡眠などを報告。→計4回の投薬調整。
- あかりの家で生活する基準ではなく、家や所属施設に戻った時にも関わっていきやすい状態を意識して調整。(事業嘱託医より)
- 利用後1週間は、22~6:00頃の睡眠。
→その後不眠(睡眠:3~5時)が2日続き、投薬調整等を経て21~7時の睡眠へ

5

第1期 まずあかりの家で生活を再構築

< 困り度5 > 食事 (手づかみ)

(1) 仮説 (行動観察より)

- 手づかみは行動問題と言うより、箸の技術的視点から検討(食材によっては、介助箸を使用できている。)
- 箸を休めることなく持って、飲み込めていない状態で次々と口に入れている。誤嚥の危険性。
- STEPを踏んでいけば、手づかみはせず食事できそう。

(2) 対応

STEP	関わり・手順
1	職員が介助をして食べてもらう。 (食べ物を器から机に出して、手づかみで食べる事への後手の対応は行わず、本人は咀嚼・嚥下のみ集中)
2	①職員がスプーンですくう⇒②皿に置く⇒③「どうぞ」で食べる⇒④スプーンを皿に戻す⇒⑤手は膝に置く。
3	職員の指示に耳を傾けつつ、介助箸で食べる。

(3) 結果：付添の元、介助箸で食べている(うどん等は一口サイズにカット)。

6

第2期 あかりの家で生活しながら、家庭支援を進める

帰省中の様子

帰省	家での様子
12/13 夕食後~ 14朝食後	・服脱ぎ等の行動もなく、過ごすことができた。 ・両親も喜んでおり、家でもグリーンピース・トマトも食べる事ができ、妹達に「ねえね、すごい!」と褒められた。
12/21 昼食後~ 22夕食後	・お手伝いとして、あかりの家で取り組んだ洗濯干しも出来た。 ・夕食調理中、待てずに母の髪をつかもうとすることあり。
12/27 ~ 1/5	・年末迎えに来られる母にサプライズでプレゼントを考え、マフラーを制作。プレゼントすると「これAが作ったんですか? すごい! めっちゃ嬉しい!」と泣いて喜んでもらえ、Aさんも笑顔に! ・マフラー作りや散歩、初詣、山歩き、洗濯干し、課題等に取り組む、穏やかに過ごせた。マフラー作りは2人の妹達にも「上手やなあ。私らもやりたい~」と褒められ、羨ましがられた。 ・歯科通院。今までは複数で対応。今回は手を持たず受診でき、父は「いつも通院翌日は筋肉痛になるのに、今回はなっていない」とのことだった。 ・年始に祖父母の家に行った際、「食べ方がきれいになっている」「靴下も履けている」「ピーピー!」と奇声を上げていない事に驚かれたとのこと。

7

第3期-1 所属施設職員が実習で成功のイメージをつかむ

所属施設職員の実習 一特に力を入れた活動・視点一

活動	視点・経過
食事	・母に伝えたポイントを同様に伝え、練習。 ・“Aさんができたら、とにかく褒める”。 ・所属施設では難しかった食事から成功をお互いに積み重ね、うまくいった時にAさんが見せる笑顔に、不安だった担当職員も“できている”実感を得ることができたと思われる。
作業	・所属施設では動き回っているか、寝転んでほぼ不参加状態。 “作業ができる”という事、“できる”為には何が必要か?。 出来る作業内容、承認を挟んだりリズム作り、動きのコントロール等。 ・Aさんは、あくびが出るほどゆったりできていた。
余暇	・家庭と同様、何もない待ち時間が課題となるので、所属施設でも取り組める課題を提示。→年末に母にプレゼントした経験から、次は妹達へのプレゼント作りとして、プレスレット作りに取り組む。 ・針で小さいビーズを通して行く行程。第1、2期のビーズ暖簾づくりから、作り上げる事への我慢強さ、プレゼントする喜びを経験しているので、根気よく担当職員と作り上げていった。 ・1帰省時、母はとても喜んでくれ、担当職員もAさんも喜んだ。

8